

国語科



【授業改善に向けて】 ----- 国語 1

【移行措置内容の完全実施のために】 ----- 国語 2

【実践事例1】 ----- 国語 3

第2学年 単元名「たからものをしょうかいしよう」（話す・聞く）

【実践事例2】 ----- 国語 7

第4学年 単元名「わたしの考えたこと」（書く）

< 国 語 科 >

【授業改善に向けて】

1 主体的・対話的で深い学びについて

国語教育の改善・充実を図るためには、これまで積み重ねてきた教育実践の蓄積を基に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて以下の3つの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。

- (1) 主体的な学びの実現に向けては、児童自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、児童の学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、児童に身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方や生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。
- (2) 対話的な学びの実現に向けては、例えば、児童同士、児童と教職員、児童と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。
- (3) 深い学びの実現に向けては、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げる学習活動を設けることなどが考えられる。その際、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。

このような学びの実現については、今までの授業時間とは別に新たな時間を確保しなければできないものではなく、現在既に行われている活動を「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善し、単元や題材の中で指導内容を関連付けて質を高めていくことが必要である。その際重要となるのは「言葉による見方・考え方」を働かせることである。言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼してとらえたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであり、それが国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身につけさせる鍵となる。

今後は、これまで以上に学習を通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められる。従って、指導者は、目の前の児童の実態や教材を踏まえ単元を通して児童に身につけさせたい資質・能力は何なのかを明確にするとともに、言葉による見方・考え方を働かせる単元構成となるよう工夫・改善を図っていく必要がある。

国語科においては、身に付けたい力を明確にすることこそが授業改善の要となる。また、「主体的・対話的で深い学び」は一単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元のまとまりの中で実現されることから、単元全体を見通し、教える場面と児童に思考・判断・表現させる場面とを効果的に設計し関連させながら深い学びへとつなげる指導が求められる。

2 授業改善の視点

<視点1> 児童に身に付けさせる資質・能力(目指す児童の姿)を明確にした単元構成の工夫

- 付けたい力を明確にし、考えの形成を重視した学習過程の工夫(指導・支援と評価)
- 意図的な振り返りの場の工夫(学びの過程や成果、身に付けた力等)

<視点2> 児童自らが「解決したい」「追究したい」と思う課題や問いの工夫

- 児童の思いを生かし、能動的な学習に向かう課題づくりの工夫
- 主体性、能動性を促す教師の意図的な働きかけ、発問等の工夫

<視点3> 協働的、対話的な学びに導く言語活動の工夫

- 児童の既存の知識や経験に新たな認識を付加、更新する言語活動の工夫(発問や板書、話し合いの場の設定、並行読書など)

【国語科 移行措置内容の完全実施のために】

1 移行措置の内容

- (1) 国語科は、全部または一部について新学習指導要領によることができるとするが、現行指導要領による場合には、新学習指導要領に定める内容の一部を追加または適用することとしている。国語科は、教科書の対応を要する教科であり、指導する学年の変更などにより指導内容の欠落が生じることをないように特例を定める教科である。移行措置の内容は次のとおりである。

平成30年度	平成31年度
第4学年においては、新学習指導要領の学年別漢字配当表に配当されている漢字により指導する。	第4学年及び第5学年においては、新学習指導要領の学年別漢字配当表に配当されている漢字により指導する。

- (2) 指導計画の作成にあたっては、他教科の学習において必要となる漢字について、当該教科等と関連付けて指導するなど、その確実な定着が計れるよう指導を工夫することが必要である。

また、言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすることが重要である。

2 教育内容の主な改善点

- (1) 語彙指導の改善・充実

○ 身近なことを表す語句、思考に関わる語句、事象や行為、心情を表す語句などを取り上げる。

- (2) 情報の扱いに関する事項の新設

- 共通、相違、原因と結果、意見と根拠、具体と抽象など情報と情報の関係性
- 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方
- 引用の仕方や出典の示し方、情報の信頼性の確かめ方など

- (3) 我が国の言語文化に関する指導の改善・充実

- (4) 学年別配当漢字表に、都道府県に用いる漢字（20字）を追加

- (5) 学習過程の明確化と各過程における学習内容の改善・充実

- 全ての領域において「考えの形成」または「考えの深化」の項目の位置付け
- 「C 読むこと」においては、現行の「文章の解釈」を、「構造と内容の把握」「精査・解釈」に分けて整理

- (6) 文章と図表等からなる非連続テキストを読む指導の改善・充実

【実践事例 1】第 2 学年 単元名 たからものをしょうかいしよう

1 単元の見目

- 宝物を紹介し合うことに興味をもち、意欲的に取り組もうとしている。
(国語への関心・意欲・態度)
- 相手に伝わるように紹介するために、話す事柄の順序を考えて話すことができる。
(話すこと・聞くこと)
- 話し手が伝えたい大事なことを落とさずに、集中して聞き、声に出して確かめたり感想をもったりすることができる。
(話すこと・聞くこと)
- 言葉には、事物の内容や経験したことを表したり伝えたりする働きがあることに気付くことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

2 単元の展開にあたって

本単元は、「話すこと・聞くこと」の「話す」系統の単元である。第 1 学年で体験した出来事について丁寧な言葉で話すことの学習を受けて、相手や目的に応じた話の組み立てや話し方について学び、相手に伝わるように話して伝える力を身に付けることを目指している。児童は、話すことには抵抗はなく、はきはきと自分の考えを述べることはできるが、友達の考えを受けて発言したり感想を言ったりする力が弱い。これは、言葉のもつ意味の認識やイメージの弱さが要因と考える。

本単元では、宝物についてスピーチする活動を通して、聞き手を意識して内容を整理し、「始め」「中」「終わり」の組み立てで話すことができるようにする。また、共感的に話を聞き、話し手が伝えたいことに関心をもって聞くことができるようにする。児童にとって、自分の宝物についてクラスみんなに紹介することは、「伝えたい」「知ってほしい」という思いを強くもつことができる題材であるとともに、聞き手となった場合にも友達の宝物を「知りたい」という思いをもつことができ、それら相互の思いの高まりが単元を通して意欲的に学習を進める原動力になると考える。

指導する際は、話すこと・聞くことの力の定着とスキルアップを図るために、これまでの学習と関連付けながら指導する。さらに、言葉にこだわる児童を育てるために、言葉そのものにも重点を当てて指導していきたい。言葉には、伝えたいことを表現したり伝達したりする働きがあること、言葉と言葉の関係や意味、言葉からイメージすることの重要性などをおさえていきたい。

〈視点 1〉児童に身に付けさせる資質・能力（目指す児童の姿）を明確にした単元構成の工夫

- 相手に伝わるように宝物を紹介するために、詳しく話すことよいこと（観点）をとらえる時間とスピーチ原稿の構成の検討をする時間を指導計画の中の重点とする。
- 既習内容を確認し、「始め」「中」「終わり」の組み立てで伝えたいことを整理すると分かりやすいことを押さえることにより、話す事柄の順序を考える力の定着を図る。
- 身近なことを表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うことができるよう、辞書を活用したり、スピーチに生かす言葉や表現を毎時間取り上げて、言葉の働きについて考えたりすることができるようにする。
- 課題に対するまとめと学習感想を書くことにより、児童自ら学びの成果を感じることができるようにするとともに、指導の評価として次時に生かせるようにする。

〈視点 2〉児童自らが「解決したい」「追究したい」と思う課題や問いの工夫

- 既習事項を振り返り、よりよい発表や分かりやすい文章は、「中」の部分が詳しいことを確認する。そのことにより、「中」の部分に入れるべきことは何かを考えることができるようにする。
- 話を聞いたら、感想を述べたり質問をしたりすることを確認することにより、集中して最後までスピーチを聞くことができるようにする。

〈視点 3〉協働的、対話的な学びに導く言語活動の工夫

- 教材文の中で宝物紹介に必要なだと思ふところにサイドラインを引き、宝物紹介ならではの観点のよさを話し合う場を設定する。話し合ったことについて板書を工夫することにより、児童が自分の紹介文を考える時に生かせるようにする。

- ペアで書いた付箋を見せ合ったり、スピーチの練習を聞き合ったりすることにより、意見を交流し合い、スピーチ内容を充実させられるようにする。さらに、話し手としての意識だけではなく、聞き手としても意識を高めることができるようにする。例えば、付箋を見せ合う場面では、互いの付箋の内容について気付いたことを伝え合うことにより、自分の付箋を客観的に見直すことができるようにする。スピーチの場面では、事柄の順序を意識しながら聞き、話し手が自分に知らせたいことは何かを考えながら聞くことができるようにする。

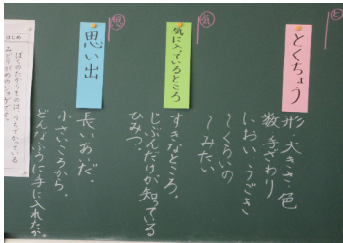
3 単元の指導計画（総時数 7 時間）

時	主な学習活動	評価規準	授業改善の視点
1	大切な宝物について、友達に伝えるようにスピーチして紹介し合うという学習課題をつかむ。	スピーチをして、宝物を紹介し合うことに興味をもち、進んで取り組もうとしている。 【国語への関心・意欲・態度】	既習内容を確認し、話す事柄の順序を考える力の定着を図る。 〈視点 1〉 辞書を活用したり、スピーチに生かす言葉や表現を毎時間取り上げて、言葉の働きについて考えられるようにする。※毎時間 〈視点 1〉
2 本時	紹介する宝物を決め、友達に伝えるためにどんなことを話すとよいかを考える。	紹介する宝物を決めて、紹介する観点に沿ってみんなに話したい事柄を考えている。 【話すこと・聞くこと】	詳しく話すとよいこと（観点）をとらえる時間を指導計画の中の重点とする。 〈視点 1〉 「中」の部分に焦点を当て、伝える必要があることについて考えることができるようにする。 〈視点 2〉 話し合う場の設定と板書を工夫する。ペア学習をする。 〈視点 3〉
3 4	「始め」「中」「終わり」の組み立てに沿ってスピーチ原稿を書き、聞き手に伝えるようにスピーチの練習をする。	話す事柄を考えて、「始め」「中」「終わり」の組み立てて、スピーチ原稿を書き、声の大きさや話す速さに気をつけて練習をしている。 【話すこと・聞くこと】 言葉には、事物の内容や経験を伝える働きがあることに気付いている。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】	スピーチ原稿の構成の検討をする時間を指導計画の中の重点とする。 〈視点 1〉 「始め」「中」「終わり」の組み立てで伝えたいことを整理すると分かりやすいことを押さえることにより、話す事柄の順序を考える力の定着を図る。 〈視点 1〉 ペアでスピーチの練習を聞き合い意見を交流する。 〈視点 2〉
5 6 7	練習を生かしながら丁寧な言葉でスピーチをする。聞き手に伝えるように話したり、集中して話を聞いたりできたかを振り返る。	声の大きさや速さに注意しながら、「始め」「中」「終わり」の組み立てて話している。 【話すこと・聞くこと】 話を集中して聞き、話の内容をとらえて感想や質問を述べている。 【話すこと・聞くこと】	話を聞いたら、感想を述べたり質問をしたりすることを確認することにより、集中して最後まで聞くことができるようにする。 〈視点 2〉 事柄の順序を意識しながら聞き、話し手が自分に知らせたいことは何かを考えながら聞くことができるようにする。 〈視点 3〉

4 展開の具体例（2／7時）

○ 学習のねらい

紹介したい宝物を決め、宝物を紹介するために話す観点について話し合い、観点到に沿って話す内容を考えることができる。

主な学習活動・内容	時間	○教師の支援	※評価
1 本時の課題をつかむ。 (1) 既習事項を振り返る。 (2) 本時のめあてを確認する。 たからものをしょうかいするために、話すことを考えよう。 2 宝物を紹介するためにどんなことを話すとよいのかを考える。 (1) 教科書を参考に、宝物を紹介するために話す観点を見つける。 ・ 特長 ・ 気に入っているところ ・ 思い出 (2) それぞれの観点の意味や言葉の使い方を考える。 ・ 特長は、まよい犬のところで勉強したよ。 ・ ～みたい、～のようなという言葉の使い方もいいね。 ・ 気に入っているとは、好きなのところや自分だけが知っている宝物の秘密のこと。 ・ 思い出は、宝物を手に入れるまでの出来事や宝物との思い出。 3 観点到に沿って宝物について話したいことを書く。 (1) 付箋に書く。  観点到別に付箋の色を変え、宝物の紹介したい点を明確にして書き出す (2) ペアで見合い、意見を交流する。 ・ 気に入っているところがよく分かるよ。 ・ おもしろい思い出だね。	5 1 5 2 0	○ これまでの学習から、「中」の部分を詳しくするとよいことに気付かせ、どんな内容を入れればよいかという本時の課題をつかむことができるようにする。〈観点到2〉  これまでの学習で使った教材の提示 ○ 宝物だということを相手に伝えるための観点到を、教科書の例文に線を引きながら考えるようにする。〈観点到3〉   3つの観点到を見つけ、線を引き、言葉の使い方を知る 観点到を色別で示し、伝えたい内容の違いをとらえさせる ○ 出された観点到を児童の活動に生かせるように板書を工夫する。〈観点到3〉 ○ 身近なことを表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うことができるよう、辞書を活用したり、スピーチに生かす言葉や表現を毎時間取り上げて、言葉の働きについて考えたり  辞書を引いて、正しい言葉の意味を知る ○ 付箋を活用することにより、話す内容の組み立てや加筆修正などを容易にすることができるようにする。 ○ ペアで書いた付箋を見合い、意見を交流し合うことにより、話し手としての意識だけでなく、聞き手としての意識をもち、書いた付箋の見直しができるようにする。〈観点到3〉	

- ・～みたいってところがいいね。
- ・もう少しわしくしたらいいよ。



友達の付箋を読む

- 4 本時の学習のまとめをする。
- (1) 宝物を紹介するために必要な観点をノートにまとめる。
 - (2) 学習感想を書き、本時での自分の学びを振り返る。

5



書いた付箋を見合い、紹介したいことを見直す

※ 紹介する宝物を決めて、紹介する観点到に沿ってみんなに話したい事柄を考えている。

(発言・付箋・ノート)

- 課題に対するまとめと学習感想を書くことにより、児童自ら学びの成果を感じることができるようになるとともに、指導の評価として次時に生かせるようにする。
- (視点1)

5 実践の考察(成果：○ 課題：●)

〈視点1〉児童に身に付けさせる資質・能力(目指す児童の姿)を明確にした単元構成の工夫

- 単元を通して、授業の中で効果的に辞書を活用したり他教科での学びを関連付けたりしたことは、児童に言葉へのこだわりをもたせ、スピーチに生かす言葉や表現を獲得させる上で有効な手立てとなった。
- 学習感想を授業の最後に書かせたことにより一人一人の学びの姿が明確になった。児童自身に学び方や成長を気付かせることができたとともに、身に付けさせたい力を意識した指導ができていたかを振り返り、指導の重点化や修正につなげることができた。
- 児童によっては、宝物を分かりやすく紹介するために、宝物になり得た理由や宝物との思い出等についてふれるとよい場合が見られた。自分の宝物に合った紹介の観点を選択できているかについて児童自身が見直すことができるよう指導方法を工夫し、スピーチの充実につなげていきたい。

〈視点2〉児童自らが「解決したい」「追究したい」と思う課題や問いの工夫

- 既習内容を提示したことで、話す事柄の順序を考えることや、「中」の部分の詳細を詳しくするとよいことを児童に気付かせるとともに、繰り返し指導することにより、定着を図ることができた。
- 既習事項の振り返りは、学習の課題を見つけさせる上で有効だったものの、児童にとって必要感を伴った活動ではなかった。児童の困り感や必要感が伴うことで、課題を追究したいという思いが高まることから、児童の実態や本時のねらい等と照らし合わせた課題提示の仕方を工夫していく必要がある。

〈視点3〉協働的、対話的な学びに導く言語活動の工夫

- サイドラインを引いてから話し合いをすることは、何について話し合っているのかをとらえやすくする上で効果的だった。また、児童から出た意見を色別で板書したり、特徴的な単語や文章表現を板書することは、児童の自力解決の手がかりとなっていた。
- ペアで話し合う前に視点を与えたことにより、互いの感想で学び合ったり、自分のスピーチ原稿を客観的に読んだりする姿が見られた。また、友達にほめられてさらに詳しくしようとする児童の姿も見られ、ペア学習の効果が確認できた。
- ペアでスピーチ原稿を読み合った際に、スピーチ練習も兼ね、本人に声を出して原稿を読ませ相手に伝えさせても良かったと感じた。また、相手へのアドバイスの手がかりとなるように、友達の原稿を読む時の視点を口頭で伝えたが、今後もその視点を生かして協働的、対話的な学びを促進していくことを考えると、掲示物(教材)で示した方が良かった。

(文責 相沢 聡子)

【実践事例2】第4学年 単元名 わたしの考えたこと

1 単元の目標

- 自分が考えたことを読み手に分かりやすく伝えようと、意欲的に文章を書こうとしている。
(国語への関心・意欲・態度)
- 書く内容の中心を明確にし、文章の構成を考えることができる。
(書くこと)
- 文章を読み返し、間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすることができる。
(書くこと)
- 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

2 単元の展開にあたって

本単元は、毎日の生活の中で、感じたことや考えたことを伝える文章を書く学習を通して、「題材の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」「共有」という書くことに必要な力を総合的に育むことをねらいとしている。

本単元では、「伝えたいことの中心を決めて、考えたこととその理由を明確にし、構成を考えて文章を書く力」「書いた文章を読み返し、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりする力」を身に付けさせる。これまで児童は、何を書いてよいか悩み、題材の設定や情報の収集で戸惑うことが多くあった。また、書き終えた後も、書き終えたこと自体に満足してしまい、進んで推敲しようとすることは少なかった。そこで、1学期に社会科「住みよいくらしをつくる」の単元で、清掃工場「あらかわクリーンセンター」を見学してごみの多さに驚いた共通体験をもとに、国語科と社会科の横断的な視点で学習を進めていく。ごみを減らすために自分にはどんなことができるか、社会科で考えたことを国語科の「書く」活動につなげ、さらに、書いた意見文を冊子としてまとめるという目標をもたせることで、書く必然性を生み出し、主体的に取り組むことで、目標とする力が身に付くようにしたい。

〈視点1〉児童に身に付けさせる資質・能力（目指す児童の姿）を明確にした単元構成の工夫

- 「構成の検討」の過程では、構成の要素となる「自分の考え」「その理由」「考えるきっかけになった出来事」をそれぞれ色分けしたカードに書くことで、児童が構成要素の違いをはっきり区別して検討できるようにする。
- 「考えの形成、記述」の過程では、自分の考えの述べ方や理由の述べ方など、文章を書くときに気を付けることを「ポイント表」にして示すことで、それを意識して文章を書くことができるようにする。
- 「推敲」の過程では、下書きした自分の文章が「ポイント表」に基づいて書かれているか「チェック表」で確認しながら読み返し間違いを正した後、ペアでお互いの文章を読み返し、正しく推敲できているところを認め合ったり、正しく推敲できていないところを教え合ったりすることで、ポイントを網羅したよりよい文章にすることができるようにする。
- 「学習振り返りカード」を活用することで、毎時間の学習の成果を確認し、達成感を味わいながら学習を進めることができるようにする。

〈視点2〉児童自らが「解決したい」「追究したい」と思う課題や問いの工夫

- 社会科の見学学習で感じた思いを発信するために書くという必然性をもたせ、主体的な学習につながるようにする。
- 導入において、表現方法に誤りのある文章を提示することで、児童に「あれ、おかしい。」という思いをもたせる。そして、その思いから、「自分たちの文章も見直す必要があるのではないか」という思いにつなげ、推敲への意欲が高まるようにする。

〈視点3〉協働的、対話的な学びに導く言語活動の工夫

- ごみを減らすアイデアを紹介する意見文をまとめた小冊子「こうすればごみを減らせる～ぼくのわたしの大作戦～」を完成させるという目標を設定し、それに向けて学級全体で取り組んでいく言語活動を設定する。

- 「推敲」や「共有」の過程では、友達と考えを交流する活動を取り入れ、友達との対話の中で、自分では気付かなかった新たな考えに気が付き、考えを広げたり深めたりすることができるようにするとともに、自分の考えを友達に認めてもらうことで、安心感や自信をもつことができるようにする。

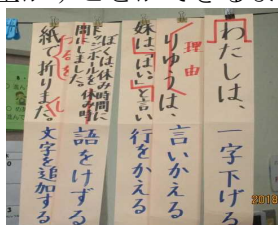
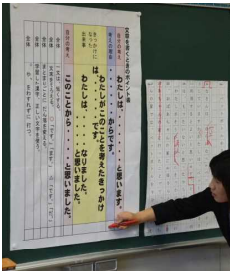
3 単元の指導計画（総時数 5 時間）

時間	主な学習活動	評価規準	授業改善の視点
【社会科において】 ○ ごみを減らすために、自分たちにはどんなことができるか考える。			
1	学習の見通しを立てる。 「自分の考え」「考えの理由」「考えるきっかけになった出来事」の構成で文章の組み立てを考える。	自分の考えを伝える文章を書くことに意欲をもっている。 【関・意・態】 考えを伝えるために必要なことを選び、文章の組み立てを考えている。 【書く】	「こうすればごみを減らせる～ぼくのわたしの大作戦！～」という冊子を作ること知らせ、学習への意欲を高め、主体的な学びにつながるようにする。〈視点 2・3〉 「自分の考え」「考えの理由」「考えるきっかけになった出来事」を色分けしたカードに書かせることで、その違いを意識して組み立てを考えることができるようにする。 〈視点 1〉 単元を通し、毎時、振り返りカードで学習の成果を確認することで、達成感を味わいながら学習を進めることができるようにする。 〈視点 1〉
2・3	組み立てメモをもとに、自分の考えを伝える意見文を書く。	文末表現や理由を書くときに使う言葉などに注意しながら、自分の考えとその理由を伝える文章を書いている。 【書く】	文章を書くときに気を付ける観点を「ポイント表」として提示することで、それを意識して文章を書くことができるようにする。 〈視点 1〉
4 本時	文章を読み返し、推敲する。	文章を読み返し、間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりしている。 【書く】	表現方法に誤りのある文章を提示し、「あれ、おかしい。自分の文章は大丈夫か。」という思いをもたせ、「推敲したい」という意欲につながるようにする。〈視点 2〉 「ポイント表」に基づいて推敲ができたか、「チェック表」で確認しながら進めることで確実に推敲できるようにするとともに、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすることができるようにする。 〈視点 1〉 推敲した下書きをペアで読み合い、正しく推敲できたところを認め合ったり、できていないところを教え合ったりして、よりよい文章になるようにする。 〈視点 3〉
5	書いた文章を読み合い、感想を伝え合う。	書いた文章を読み合い、感想を伝え合っている。 【書く】 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。 【言語】	書いた文章をグループで読み合い、「なるほど。」「その考えいいね。」と思ったところを伝え合うことで、考えを広げたり自信をもったりすることができるようにする。 〈視点 3〉
【社会科において】 ○ 完成した冊子をもとに、互いの意見を交流する。			

4 展開の具体例（4／5時）

○ 学習のねらい

文章を読み返し、間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすることができる。

主な学習活動・内容	時間	○教師の支援	※評価
1 本時の学習課題をつかむ。 下書きした文章を推敲して、よりよい文章に書き直そう。	5	○ 表現方法に誤りのある文章を提示し、「あれ、おかしい。自分の文章は大丈夫か。」という思いをもたせ、本時のめあてにつなげるようにする。 ＜視点2＞	 誤りのある文章を読む
2 文章を推敲する。 (1) 推敲の方法を確認する。 ・語を言い換える記号 ・語を削除する記号 ・文字を追加する記号 ・文字を一字下げる記号 ・改行する記号	1 5	○ 導入で提示した文章の誤りを、記号を用いてどのように推敲したらよいかを全体で確認し、自分の推敲に生かすことができるようにする。   確認した推敲の記号 推敲の仕方の確認	
(2) 下書きした文章を推敲する。 ・自分の考えの述べ方 ・理由の述べ方 ・きっかけの書き方 ・構成の仕方 ・誤字脱字		○ 「ポイント表」に基づいて推敲できたかを、「チェック表」で確認しながら進めることで、確実に推敲できるようにするとともに、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすることができるようにする。 ＜視点1＞	 チェック表の確認
(3) 正しく推敲できているかペアで確認する。 ・正しく推敲できたところ ・推敲できていないところ		○ 推敲した下書きをペアで読み合い、正しく推敲できたところを認め合ったり、できていないところを教え合ったりすることで、よりよい文章になるようにする。 ＜視点3＞	  ペア学習の進め方 ペア学習の様子

3 清書する。 (1) 下書きをもとに清書する。 (2) 清書した文章を読み返す。 4 学習を振り返る。 (1) 振り返りカードに記入する。 (2) 学習感想を発表する。  学習感想の発表	2 0 ○ 清書することに戸惑っている児童には、声をかけて励ましたり下書きを一文字ずつ読み上げたりすることで、書く活動を促すようにする。 ○ 清書した文章を読み、下書きと比べることで、整った文章になったことを実感させ、達成感を味わうことができるようにする。 5 ○ 振り返りカードで学習の成果を確認することで、達成感を味わうことができるようにする。 〈視点1〉 ○ 学習感想を発表し合うことで、本時の学習の成果を全体で共有することができるようにする。	 下書きをもとに清書  振り返りカードへの記入 つ章しい たにた ならけ なっど たより すち でよい がこ よいつ か文う で、人 、す ち、自 や、分 ん、と んこ とな なし おの すの 学習感想から（部分）
---	--	--

5 実践の考察(成果：○ 課題：●)

〈視点1〉児童に身に付けさせる資質・能力(目指す児童の姿)を明確にした単元構成の工夫

- 「構成の検討」の段階で、組み立てメモを作成する際に、書きたいことを構成要素ごとに色分けしたカードに記入させたことで、児童は、「自分の考え」「考えの理由」「きっかけになった出来事」という構成要素の違いに気付きそれらを区別して構成を考えメモを作成することができた。また、その色分けは、「ポイント表」(資料1)や「チェック表」(資料2)でも同じ色分けにしたことで、児童は、単元を通して構成要素の違いを意識して学習を進めることができた。
- 「考えの形成、記述」の段階では、身に付けさせたい表現方法を「ポイント表」として提示しそれをもとに文章を書かせた。このことにより児童は、身に付けさせたい表現を意識し適切に用いた文章を書くことができた。また「推敲」の段階では、「ポイント表」に基づいた「チェック表」を準備し推敲させたことで、児童は、一貫した観点で間違いを正したりよりよい表現に書き直したりすることができた。さらに、自力で推敲させた後に、ペアでお互いの文章を読み返し、正しく推敲できているところを認め合ったり、できていないところを教え合ったりすることでよりよい文章にすることができた。これらのことから、児童にどんな力を身に付けさせたいかを教師が明確にし、児童がそれらを意識して学習を進められる工夫を取り入れることで、期待する力を育てることができるということが確認できた。
- 毎時間「学習振り返りカード」(資料3)を活用しながら学習を進めた。カードには、毎時の「めあて」と「まとめ」のほかに、「感想」及び「本時の目標を達成するための下位目標の評価欄(3段階評価)」を設け、1時間ごとの学習の足跡が確実に残るようにした。その結果、児童は、学習の成果を確認し達成感を味わいながら学習を進めることができた。しかし一方で、読み手に自分の考えを伝えるためにどんなことを書けばよいのかと

